



らのイナん #9

はじめてのご挨拶編

著:藍澤たすく

イラスト:かもめ遊羽

## らのけんってどんなお話？

三郷<sup>みさと</sup>学園高校「ライトノベル研究部」

——通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを目的とした志<sup>こころ</sup>しの高い部活動……のはず、なんだけれど……。アレ？ 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりゆるくない？

だがしかし！ それこそが「らのけん」の魅力！ という感じで展開するまったく系日常部活コメディなのです！



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。覆面ラノベ作家一条れんとしても活躍中!



**赤城操**

クールビューティーな眼鏡っ子。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。校正能力もプロ並み。



**黒田美玖**

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦勞は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



**紺野司**

ラノベ作家としての華子、つまり一条れんを担当する編集者。AG文庫編集部に所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。



**青山一斗**

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

コミピュア。

それは国内でも最大規模を誇るオリジナル作品限定の同人誌即売会イベントだ。

さまざまな二次創作・パロディ作品が幅を利かせるコミックターゲット、通称「コミゲ」の規模には比べるべくもないが、それでも会場の「ビッグ齋藤」周辺はお目当てのサークルに向かうお客さんでひしめき合っていた。

「わー！　これが『ビッグ齋藤』ですかー！　大きいんですねー！　あたし、ここに来るの初めてなんでわくわくしますー！」

モノレールから駅に降り立った華子は、正面に見える国際展示場『ビッグ齋藤』を前にうきうきしながら笑顔を振りまいた。

「へー、思ったよりでかいんだねー」

「なにしろ2日間で10万人ぐらいは来るらしいからな〜」

華子の後に続く緑川萌みどりかわもえと青山一斗あおやまいっとうも感心しながら会場を見つめている。

「よーっし！　あたし頑張っちゃいますよー！」

華子はぎゅっと両拳りょうこぶしに力をこめて気合を入れた。

そう今日、華子があそこに来たのは崇高な目的があつてのことなのだ。

華子（ペンネーム…一条れんいちじょうれん）のデビュー作「まんまミア・キャット！ー今なら無料でキャットがついてきますが何か？」（通称…まんみー）のイラストを描いてくださった蔵内豪くらうちこう

三郎先生にご挨拶するという崇高な目的が！

……萌と一斗はもちろん「一人で行くのは怖いよ！お願いだからついてきてよ！、うるうるうるうる」と華子に泣きつかれて同行しているというわけだ。

「はあ……でもやっぱり緊張するわ……」

「ねえねえ、華ちゃん、蔵内先生ってどんな人なの？」

どきどきする胸に手を当てて小さく深呼吸をする華子に、萌が無邪気に問いかける。

「んっと、担当の紺野さんが言うには『ちょっと無口で変わった人だけど、仕事に対してはとても真摯でいい人なんですよ』……っていうことらしいんですけど……何しろまったくメディアとか表に出ない人だから正直全然判らないの！HPもないしTwitterもやってないし……」

「へー、謎のイラストレーターさんなんだねー」

「メディアに全然出ないとか、案外気むずかしい人なんじゃないの？」

「あー、そうだよねー、青やん。イラストレーターさんには孤高の芸術家タイプって人、結構多いらしいもんねー」

びたっ。

萌と一斗が会話する横で、華子が突然動きを止めた。

「どったの？華ちゃん？」

「……やっぱりあたし帰ります……」

「「は？」」

突然の発言に萌と一斗はぼかんとした顔になる。

「だ、だって、もし今日のご挨拶であたしが粗相しちゃったら……蔵内先生の気分を害しちゃったら……もう『まんみー』のイラスト描いてくれなくなるかもしれないじゃないですかー!! 2巻出なくなっちゃうかもしれないじゃないですかー!!」

「考えすぎだよ、華ちゃん。紺野さんも『いい人』だって言ってたんでしょ?」  
「で、でも、でも、でもでもであたしこんなに緊張しちゃうってて今も台詞噛み噛みだししししちゃんとご挨拶する自信なんてななな」

「心配御無用！華ちゃんの緊張ならあたしが解きほぐしてやるぜー！」

「ふあっ!?!」

華子の胸が背後から突然鷲掴みにされる。

「ほーれほれほれ、ここをこうして揉みほぐせば一緒に緊張もほぐれてくるじゃろう?」

「く、黒田さん!?!」

そう、華子のちっばいを慣れた手つきで揉みしだいているのは、三郷学園高校2年ライトノベル研究部所属黒田美玖その人だった。

「く、黒田さんは今日は呼んでない……はずです……よ……ひゃん!?!」

「水くさいな！華ちゃん！、華ちゃんとあたしは一心同体でしょう? たとえ華ちゃんが地

球の裏側にしようとも、華ちゃんが困っていたらすぐに現れてセクハラ……じゃなかった方になつてあげるわよ。お？ 華ちゃん、ちょっと成長したね？」

「ちよっ……や、やめてください！ ほんとに……やめ……て……!! 今日他のも……見て……あつ……」

「それだけ言えるならだいたい緊張もほぐれてきたんじゃないの？ じゃあ、最後の仕上げと  
いこうかな」

美玖の瞳がきらりと輝いた。

そして。

かぶっ。

「ひっ……!？」

美玖のするどい犬歯が華子の耳をそつと甘噛みした。  
続いて甘い吐息をふうふうと吹きかける。

コウカ ハ バツグン ダ！

華子は全身の力が抜け、へなへなとその場に座り込んでしまった。

しかし美玖のセクハラ攻撃が止むことはない。

そしていつの間にか華子と美玖の周りには、わらわらと「大きいお友達」が集まり始めていた。

「おい、すげえぞ！ 美少女二人が百合百合してる！」

「え、なにになに？」

「あ、俺、知ってる、これ今やってるアニメの『聖コスモス学園』のコスプレっしょ？」

「マジ？ すげー完成度高いじゃん！」

「え？ じゃあ、あのちっばい採まれてる方がヒロインの栞ちゃん？」

「やべえ、アニメより可愛いじゃん！ 超ロリ可愛いじゃん！」

すごい偶然ではあるが、華子と美玖の今日の私服は『聖コスモス学園』の制服に酷似しているらしい。

そしていつの間にかギャラリーが10人20人と増え、続々と二人を取り囲んでいく。

もちろん美玖のセクハラ攻撃が止むことはない。

というか、ギャラリーが集まったことで興奮した美玖は、むしろそのセクシャルハラスメントをますます暴走させていく。

「もう……ほんとに……あつ……く、くろださ……あつ……」

「すいません、写真一枚いいですか!？」

「お、俺もぜひ一枚!」

「こっちにも目線ください!」

ギャラリイの中のカメラ小僧たちが次々に華子と美玖の痴態を激写していく。

いつの間にか華子と美玖の周りの人だかりは凄まじい数になっていた。

「もう緊張とかそういうレベルじゃないよね……」

「そうだな……」

「華ちゃんセクハラしてる時の黒たん、ほんとに生き生きしてるよね……」

「そうだな……」

萌と一斗は仲間だと思われないように、100mほど距離を置いていつもの美玖のセクハラ攻撃を生温かく見守っていたのだった……。



「もう、黒田さん! 次やったら職員会議じゃ済みませんよ! ケーサツですよ、ケーサツ!!」

「ははは、ごめんごめん華ちゃん。久しぶりの青カンだったんでついついテンション上がっ

ちゃってさ、めんごめん!」

まったく悪びれた様子もない美玖にさらにぶんぶんしながら華子はコミビュアの会場へと入っていった。広大な会場は多くの人に溢れ、熱気に満ちている。

「華ちゃん、蔵内先生ってどこのブースにいるの?」

「えーと……カタログによるとA-11にいらっしやるはずですよ」

「A-11ってというと、あの端っこのかな?」

萌が指さした先を見て、華子は硬直した。  
なぜならそこにはプロレスラーもかくやというガタイの良いマッチョメンが座っていたからだ。そのマッチョメンは体が大きすぎるせいか、パイプ椅子を2つも使ってふんぞり返って座っている。

見たところ、身長は2m近くあるのではないだろうか。

鍛え上げられた大胸筋がピチTを張り裂かんばかりにその存在を主張している。

上腕二頭筋は文字通り華子の頭二つ分ぐらいの大きさがあった。

角刈りの頭はいかにも体育会系というオーラ満載だった。

そしていかつい顎と鼻に、眼光鋭い三重の三百眼。そこには見る者すべてを射すくめるような有無を言わせぬ迫力があつた。きつと表情筋だけでもダンベルを持ち上げられるに違いない。



「うわあ〜名前に違わず豪快そうな人だね、蔵内豪三郎先生」  
 「あのガタイであんな萌え絵描けるなんてある意味奇跡だよなあ〜」  
 ため息まじりに一斗がとても失礼な発言をする。それ、業界には結構いらっしやるパターンですから！

「……やっぱりあたし帰ります……」

「華ちゃん!」

心なしか青ざめた表情で、華子はくるりと踵を返した。その手を慌てて萌がつかむ。

「どうしたの? 華ちゃん? 蔵内先生は目の前だよ? ご挨拶しなくていいの?」

「だってだってだって、すごい怖そうな人なんだもん! あたし、あそこまで行ったら、なんだか判らないけど、絶対泣いちゃいそうなんだもん!!」

もう、すでに泣いています。

「しょうがない。まあ、華ちゃんがそう言うなら帰」

「もしかして『まんみー』の一条先生ですか!」

萌の台詞を遮るように、マッコヨメンが立ち上がって華子の方へ近づくと歩いてくる。

どうやら今日華子が挨拶に来ることを、事前に紺野から聞いていたようだ。

「ひいひい……」

その迫力に華子は言葉にならない悲鳴をあげる。

華子の目の前に来たマッコヨメンはまるで巨大な壁のようだった。横で見ていた萌は思わず妖怪のぬり壁を連想し、身を縮こまらせた。

「やっぱり、そうだ! 一条先生ですね! いやー『まんみー』ではうちの蔵内が大変お世話になりました!」

「え、『うちの』……?」

ニコニコしながら華子に挨拶してくるマッコヨメン。

華子は事情が判らず、涙目でぼかんとマッコヨメンを見つめている。

「あ、申し遅れました。わたくし蔵内豪三郎のマネージャーを務めております、早乙女浩美と申します」

マッコヨメンが、甚だ名は体を表さない感じの名刺を差し出した。

「え? どうしてあたしのこと?」

「一条先生のごとは紺野さんからすでに伺っていますので。さささ、どうぞこちらへ」

マッコヨメン……もとい、早乙女に誘われて華子はA――ブースまで歩いていった。

「!」

そこで華子は思わず息を呑んだ。

なぜならそこには金髪碧眼の美少女が静かに座っていたからだ。

「蔵内先生! 一条先生がお見えになりましたよ!」



早乙女の問いかけに、蔵内先生と呼ばれた少女がゆっくりと顔をあげた。透き通るような白い肌。まるで西洋人形のように整った顔立ちは見る者を魅了するオーラに満ちあふれていた。

「は、華ちゃん、蔵内先生って男じゃないの？」

「え？ え？ あたしもお会いするのは今日が初めてだから……え？ え？」

あからさまに戸惑う萌と華子。

その様子を見て察したのか、早乙女がゆっくりと言葉を接ぐ。

「蔵内豪三郎、というのは蔵内先生が敬愛する曾祖父のお名前を拝借してペンネームにしたものなのです。本名は蔵内・マリアンヌ・葉子と申しまして、正真正銘の女性です。ご安心ください」

「マリアンヌ？」

「はい。蔵内先生はフランス人のお母様と日本人のお父様をお持ちなのです」

にこやかに説明する早乙女。

対する華子は、いきなりの特殊属性でんこもりキャラ登場で理解が追いつかず、ただただ呆然とするばかりだった。

「――」

マリアが早乙女に何やらひそひそと耳打ちした。

「ふんふん、なるほど。蔵内も一条先生にお目にかかれて大変光栄です、と申し上げております」

「あ、ど、どうもこちらこそ光栄です！」

「ふんふん、なるほどなるほど。『まんみー』に登場するキャラはどの娘も魅力的で大変描きがいがありました、と蔵内は申しております」

「あ、あ、ありがとうございます！」

緊張と戸惑いとでガチガチになった華子はなんとか返事をするだけで精一杯だった。

「ねえ、青やん……蔵内先生ってなんでいちいちマネージャーさんを通して喋ってるの？」

「もしかしてフランス語しか喋れなくて、あの人が通訳してるとか？」

「あいや、これは失礼！」

「ひひひ！」

いきなり自分たちの方にぬっと顔を突き出した早乙女に、萌と一斗はぎょっとした。

「蔵内先生は大変内気な方で直接人と話すことができないのです。ですから私がこうして間に入って会話をさせていたいております。何卒ご理解ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます」

（ただの伝言ゲームじゃねーか！）

萌と一斗は同時に心の中で突っ込んだが、マッチョメン・早乙女が怖かったので言葉に出す

ことはできなかった。ただただ愛想笑いを浮かべてウンウンと頷くのみである。

「え？ あ、はい、ふんふんなるほど、なるほど。ときに一条先生。それは『聖コスモス学園』のコスプレですか？」

「はい？」

突然の問いかけに華子はほかんとした。

先ほど美玖のセクハラ攻撃を受けていた時にギャラリーの「大きいお友達」がそんなことを言っていたような気がするが、華子にはまったくそんなつもりはなかったからだ。

「ふんふん、なるほどなるほど。一条先生がどのようなファッションをされようが個人の自由だとは思いますが、コミビュアは純粋な創作系イベントですから、そういった二次創作・コスプレはコミゲなどでされた方が良いでしょうか。特にご自身が作品を発表されている作家としての立場があるならば、なおさら気を使うべきではないでしょうか……と蔵内は申しております」

「はわわわー!?!」

思ってもよらぬ指摘に華子は盛大に狼狽えた。

見るとマリアがわずかに頬を膨らましてるのが見て取れた。

どうやらおかんむりのご様子だ。

(ど、どどどどうしよう!?! どうしよう!?! それは誤解ですって説明しなきゃんですけど、どう説明していいか全然わかんないよー!)

テンパった華子はあわあわと両手を動かすものの、まったく言葉が出てこない。

やがてすつとマリアが立ち上がり、つかつかと華子の方に近づいてきた。

身長は170cm近くあるだろうか。

一見スレンダーながら出るところはしっかりと出ているというモデルのような完璧なプロポーション。

彼女が一步踏み出すごとに、その金髪がふわりふわりと優雅に揺れている。

だが、その碧眼に宿る光は冷徹で、見る者の心を凍らしめる冷たい迫力に満ちていた。

(うわっ、怒られる!?! あたし蔵内先生に怒られちゃうー!?! もう終わり、もう終わりだわー! 蔵内先生に「まんみー」のイラスト描いてもらえなくなっちゃうー!!)

華子が最悪の展開を覚悟してぎゅつと目を瞑った瞬間。

チユツ。

唇に柔らかな感触があった……?

「!?!」

目を開けた華子は驚愕した。  
なぜならマリアがしっかりと自分に口づけていたからだ。

「んー!? んー!?」

華子は必死に唇を放そうとするが、マリアはがっちり華子を抱きしめていてそれも叶わな  
い。

突然の出来事に萌と一斗と美玖はただただ啞然とするばかりだった。

「ふんふん、なるほどなるほど。『まんみー』に出てくるキャラはその娘も魅力的でしたけど、  
一条先生ご本人が一番魅力的ですわ、と蔵内は申しております」

「『絶対言ってねーだろー!』っていうか今は何も喋つたらんやないかい!!』」

「つてか華ちゃんから離れやがれ、この野郎! 華ちゃんにセクハラしていいのはあたしだけ  
と決まって……ふむっ!?」

華子とマリアの間に割って入った美玖を、今度はマリアががっちり抱きすくめた。

「な、何しやがる、放せ! はな……あっ!?」

ブチュー。

今度は美玖が盛大に口づけられた。

突然の出来事に美玖は目を白黒させている。

どうやらセクハラする事には慣れていても、されることには慣れていないようだ。

「ふんふん、なるほどなるほど。一条先生のお連れのお嬢さん……こういうボーイッシュでワ  
イルドな方も嫌いじゃないです、と蔵内は申しております」

「いや、だから絶対言ってねーだろーっの!!」

萌と一斗が同時に突っ込む。

ようやくマリアから解放された華子は、へなへなとその場に座り込んで魂が抜けたような  
表情になっていた。

「おい、見るよ! 美少女二人の生キスシーンだぞ!」

「おいおいマジかよ!? 早くカメラ持ってこい、カメラ!」

「あ、片一方はさっきの『聖コスモス学園』のコスプレしてた娘じゃん!?」

美玖とマリアの周りに凄まじい勢いで人だかりが形成されていく。

そして焚かれるフラッシュの灯、灯、灯。

もはや事態は収拾不能なほど拡大していた。

萌と一斗はただただそれを呆然として見守るしかない。

「まあまあまあ、おフランス育ちの蔵内先生にとってはこれは軽いスキンシップ……ご挨拶の

ようなものですから、皆さんお気になさらないで下さい」

「「気にするわー!!」

にこやかに説明する早乙女に、萌と一斗は渾身の力を込めて突っ込んだ。ともかくにも、こうして初めての「ご挨拶」は無事終了したのだった。

……いや、無事じゃねーよ!!

つづく

●「らのけん！」シリーズ掲載号一覧

★2014年

- GA文庫マガジン7月24日配信号…らのけん!  
 GA文庫マガジン9月合併配信号…らのけん!  
 GA文庫マガジン10月27日配信号…らのけん!  
 GA文庫マガジン11月27日配信号…らのけん!  
 GA文庫マガジン12月25日配信号…らのけん!  
 2 夢の最終選考編  
 3 はじめてのおつか……うちあわせ編  
 4 思い切って告白しちゃうぞ編  
 5 ペット攻めたり編

★2015年

- GA文庫マガジン1月22日配信号…らのけん!  
 GA文庫マガジン2月26日配信号…らのけん!  
 GA文庫マガジン3月26日配信号…らのけん!  
 6 はじめての発売日編  
 7 かんこれ、始めました編  
 8 MISAOSTRIKE BACK編